

図書館の至宝





1 類聚古集(国宝)

全十六帖 藤原敦隆編 平安時代成立 写本 縦二二・三×横一四・二cm
(請求記号〇二一五八〇一六)

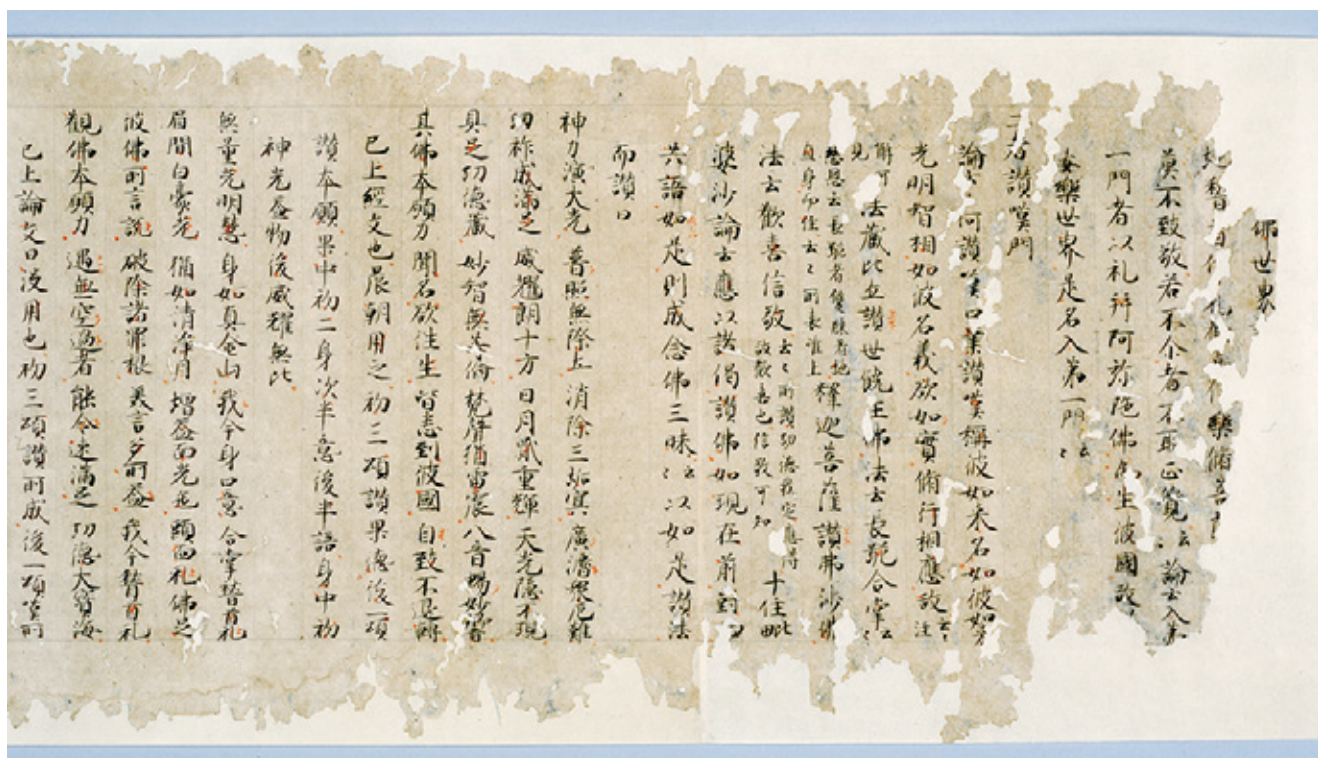
「類聚」とは、同じ種類のものをそれぞれ一つに聚める意で、雑纂一定の配列を設けずに集めること)や年代順などに対比して、書物の編纂方法の一つである。「古集」は、この書が編まれた平安時代から見えて古い歌集である『万葉集』をいう。そういう書名からわかるように『類聚古集』は、全体として一定の配列方法の見つけにくい『万葉集』の歌を、大きくは長歌・短歌・旋頭歌という歌体別にまとめ、さらにそれぞれを、春・夏・秋・冬・天地・山水などの題材によって分類し、また、春では春の風物や行事の推移の順序に従って配列するというように編集し直したものである。

編者は藤原敦隆(?-一一二〇)。したがってその没年(一一二〇)までに成立したことになる。成立後まもなく読まれ始めたようであり、敦隆と姻戚関係にあった源俊賴(一〇五五-一一二八)が歌作の際に用いたり、同時期の歌人藤原仲実(一〇五七-一一一八)によって編まれた歌学書『綺語抄』に利用されたという。

本書の貴重さの第一は現在に伝えられている『類聚古集』の写本が本書だけであること、第二は『万葉集』の歌を分類・編集した最初の書物であること、第三は万葉仮名で記された各歌の本文の伝わり方や当時の読み方が知られることである。

卷三、四などの巻末には、「一見了」として伏見天皇の宸筆といわれる花押がある。

本書は昭和二十八年(一九五三)三月に国宝に指定されている。



2

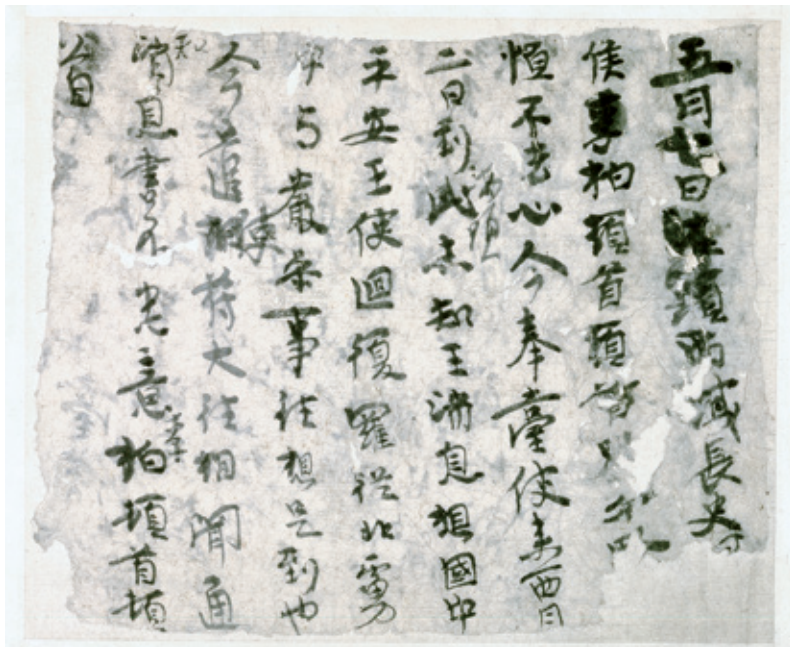
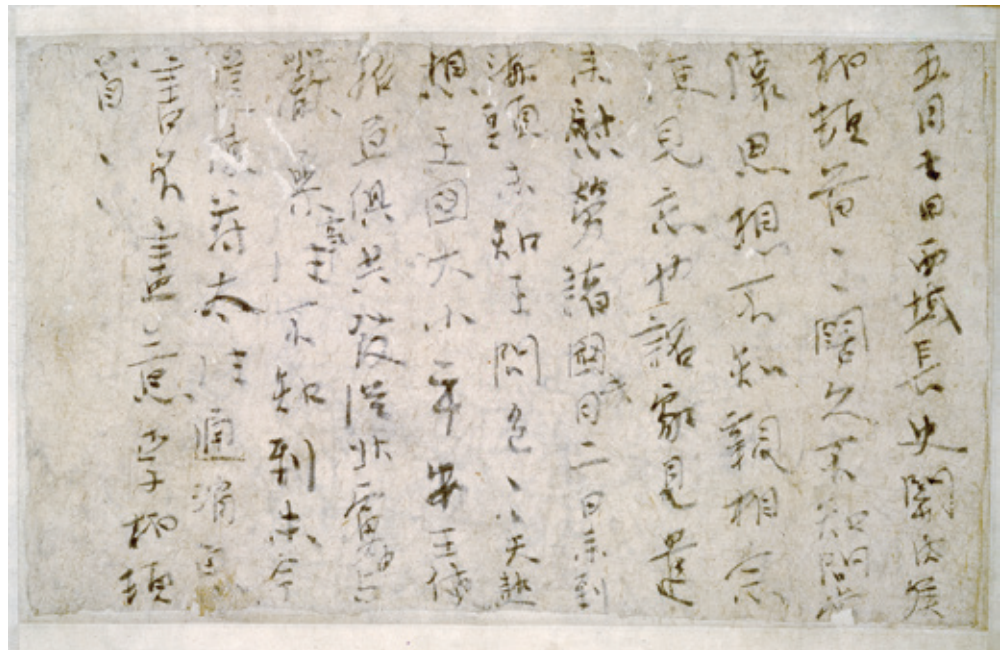
念仏式ねんぶつしき（国指定重要文化財）

一巻 中川実範著 長承四年（一一三五）写 縦二六四×横八七八・七cm
（請求記号〇二二・一三三・一一）

本書は平安末期の長承四年（一一三五）書写の奥書を有するきわめて珍重すべき浄土教系の文献である。ところが巻首を欠いているため、首題並びに撰号が判らないまま本学図書館に伝えられて来た。

本書の著者中川実範（？～一一四四）は藤原顕実の息子で、はじめ興福寺で法相学を習学し、次いで醍醐寺で密教を受法している。のち東大寺の別所光明山寺に入り、多くの浄土教関係の書を残した。『念仏式』は浄土教の実践法である五念門①礼拝門、②讃歎門、③作願門、④觀察門、⑤廻向門の行法を説く。インド・中国の経論章疏のほかに『往生要集』が比較的よく引用されており、叡山浄土教の影響が指摘されている。龍谷大学本は、巻末に「長承乙卯歲暮春丁酉日写也 釈種（署名梵字四字）」の書写奥書があり、実範在世中の書写にかかる南都浄土教系資料としてその価値はきわめて高い。

昭和四十二年（一九六七）六月に国の重要文化財に指定された。



3

李柏尺牘稿(二通)

(国指定重要文化財)

ローラン(楼蘭)出土 前涼大元五年(三二八)筆

A 縦三・八×横三・九・七 cm

B 縦三・八×横二・八・五 cm

(西域文化資料五三八)

大谷探検隊第二次探検隊員の橘瑞超氏が、一九〇九年に中央アジアのロプ湖北岸のローラン古址より、発掘・将来した文書である。

本資料は一般に「李柏文書」と呼ばれ、首尾完存のA・B両文書と三十九の断片群とで構成されている。A・B両文書からその内容を見ると、前涼国の使者が西域諸国を歴訪するにあたり、西域長史李柏が符太(B文書は符大)にもたせた、訪問先の各国王に宛てた書状の草稿と考えられている。

また本資料の縦の長さは、漢代の一尺に相当し、当時使用されていた木簡の長さと同じである。書写材料として、紙が普及していくごく初期の遺品であり、更に、書写年代も前涼太元五年(三二八)と考证されている。紙を使用して筆記された首尾完結した書状で、古代中国の文書様式を明らかにした資料として、昭和二十八年(一九五三)十一月に国の重要文化財に指定された。



4

ひやくまんとうだに 百万塔陀羅尼

三基 自心陀羅尼・相輪陀羅尼 高さ二・五cm／二・三cm／二〇・七cm

（請求記号〇三・六九一／〇四・三二一・七二一）

百万塔は、『続日本紀』の記事によれば、藤原仲麻呂の乱を契機に、称徳天皇（七一八～七七〇）が露盤の下に根本・慈心・相輪・六度等の陀羅尼を収めた三重小塔百万基の造立を発願し、宝亀元年（七七〇）に完成し、諸寺に分置したものである。

この事業の所依の経典は、造塔事業の功德を説く「無垢清光大陀羅尼經」であり、それは鎮護国家・滅罪を目的としている。現在法隆寺には、約四千六百基余りが所蔵されていることが確認されている。この百万塔もそれらと同様のものである。

百万塔は轆轤挽きの技術で作成され、三層をなす塔身部（高さ約一二cm）には直径二・五cm余りの陀羅尼の納入孔が穿たれ、全体に胡粉を塗布している。その底部には轆轤軸に材を固定するための爪跡が認められる。納入された陀羅尼は前記のように四種類あり、龍谷大学所蔵のそれは冒頭の五行が欠損しているものの、その内容より相輪陀羅尼であることが確認される。これらの陀羅尼は印刷されたものであるが、木版か銅版かで見解は分かっている。

また、塔身部・相輪部（高さ九cm）の底部には多くの製作年月日・左右の工房名・工人名等が墨書きされている。本学所蔵のそれも相輪部に墨書痕が認められるが、虫喰いのため判読困難である。

本学所蔵品も含め百万塔は、その目的からも窺われるように、日本古代の仏教を考える際の貴重な遺品といえよう。



5 往生要集

六冊 源信著 建長五年(一二五三)刊 縦二四・〇×横一五・〇cm
(請求記号〇二一・二五〇・六)

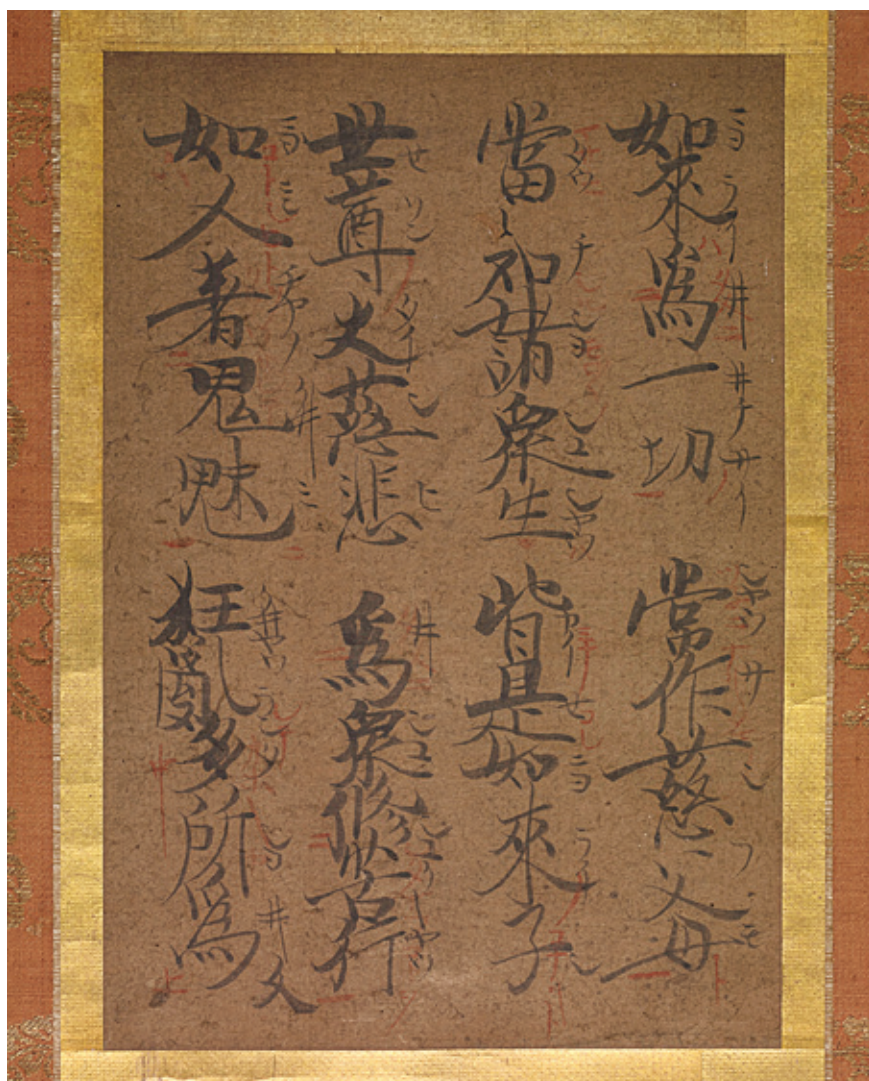
『往生要集』は、恵心僧都源信(九四二―一〇一七)が寛和元年(九八五)に著わした、わが国浄土教思想史上最高の書といわれている。内容は三卷(本末六卷)十門(厭離穢土・欣求浄土・極楽証拠・正修念仏・助念方法・別時念仏・念仏利益・念仏証拠・往生諸行・問答料簡)から構成されている。一六〇部に及ぶ經典から、往生極楽に関する九五二の要文を選び集め、天台仏教の立場にありながら、諸経論の教説を互いに会通させ総合的に捉えようとする自らの浄土教思想を述べたもので、その後の思想、美術などに広く影響を及ぼすものであった。

龍谷大学本は、全部で六冊から成り、第六冊末に「建長五年在歳癸丑四月肇彫九月畢切 願主道妙」の記載がある。『往生要集』の版本については、鎌倉時代だけを見ても、記録から承元版・建保版・建長版の存在が知られている。このうち、本書をはじめとする建長版が広く読まれていたといわれている。本書成立の翌年に中国の周文徳によって天台山国清寺にもたらされ、宋朝の真宗皇帝を初め多数の帰依者を得、その影響は中国まで及んだ。

6

親鸞聖人筆涅槃經文

一幅 劉宋慧嚴等校訂 親鸞聖人筆写
縦二・三×横一五・二cm(全体縦七九・二×横三一・一cm)
(請求記号〇四三二七三二一)

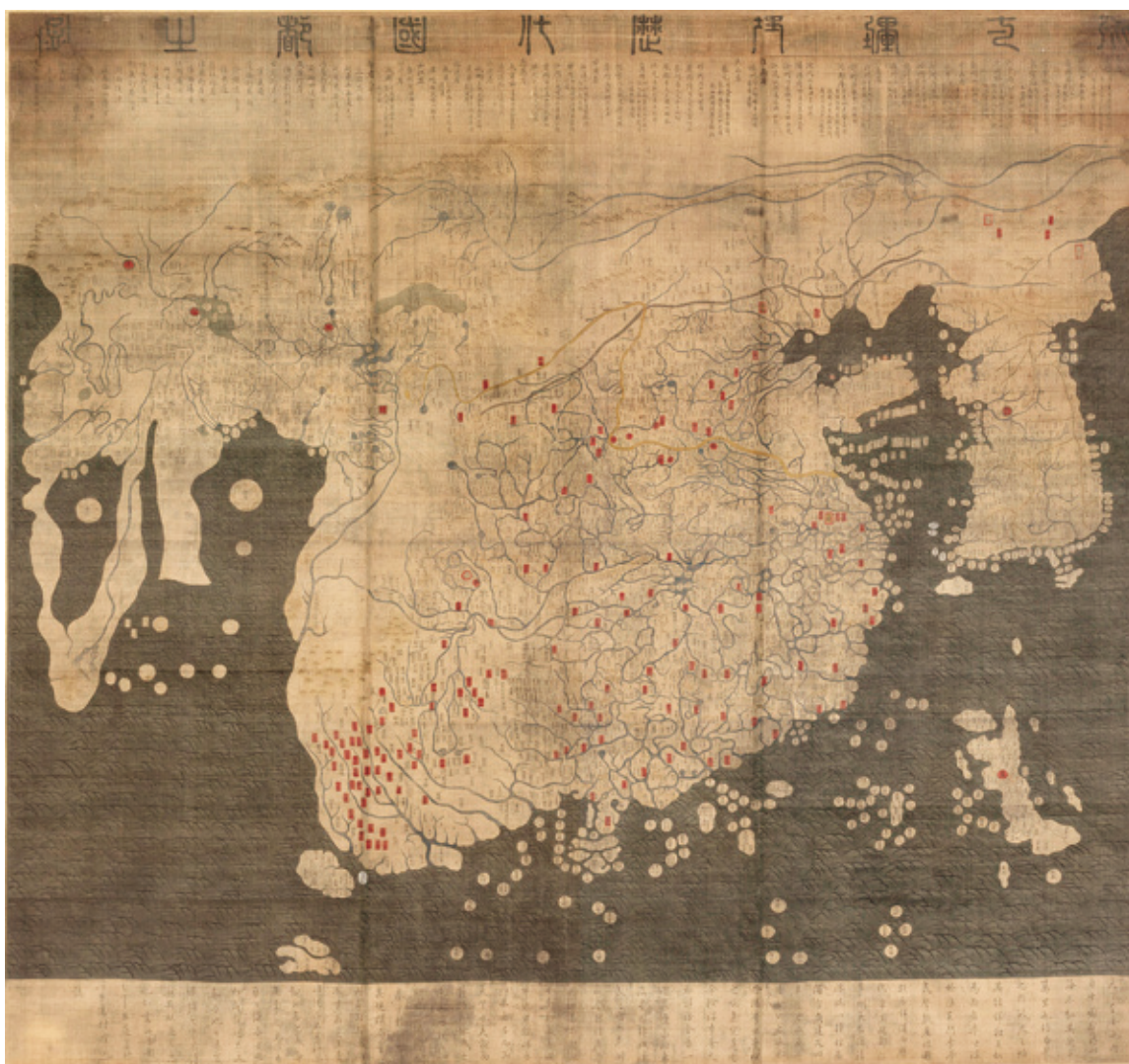


『涅槃經』の詳しい名称は、『大般涅槃經』といい、釈迦の入滅を叙述し、その意義を説く經典である。『涅槃經』には、小乗の『涅槃經』(西晋白法祖訳『仏般泥洹經』など)と大乘の『涅槃經』(北凉曇無讖訳『大般涅槃經』など)がある。大乘の『涅槃經』には、悉有仏性(一切のものは悉く仏性を有すること)と如来常住(如来が生滅・変化なく常に存在すること)が説かれており、日本仏教思想史の上で大きな影響を与え、宗派を越えて、成仏を論ずるのに必要とされた經典である。

『涅槃經』は、浄土真宗にも多大な影響を与えたことは言うまでもなく、親鸞聖人の教えの拠り所の一つになったのであり、聖人の主著である『教行信証』にも、「信巻」逆誘撰取釈などをはじめ、引用が実に三十三回にわたってなされている。また、浄土和讃の諸経意の「無上は真解脱」「一子地は仏性なり」などは、『涅槃經』により讃詠したものである。

本資料は、記されている文字から判断すると、劉宋の慧嚴(三六三～四四三)らが校合訂正した南本の『大般涅槃經』(全三三卷)を、聖人が書写したものであることが確認できる。高田専修寺が所蔵する『大般涅槃經要文』は、北本とされる北凉の曇無讖訳『大般涅槃經』(全四〇卷)を、聖人が抄出した書物として知られるが、本資料から、南本についても、聖人が影響を受けていたことを知ることができるのである。

資料に記されている一文は、第一八巻の一部であり、朱筆が施されている。恐らく本来は、聖人が書写して朱筆を加えた卷子本が全巻存在していたのであろうが、流传していくにつれて、各巻で分与され、やがては卷子本自体を裁断して、門末の信徒に分配されていたようである。



7

混一疆理歴代国都之図

一舖 李薈作 一四七〇年代以降改訂製作

縦一五・〇×横二六三・〇cm(全体縦二四五・〇×横一八七・〇cm)

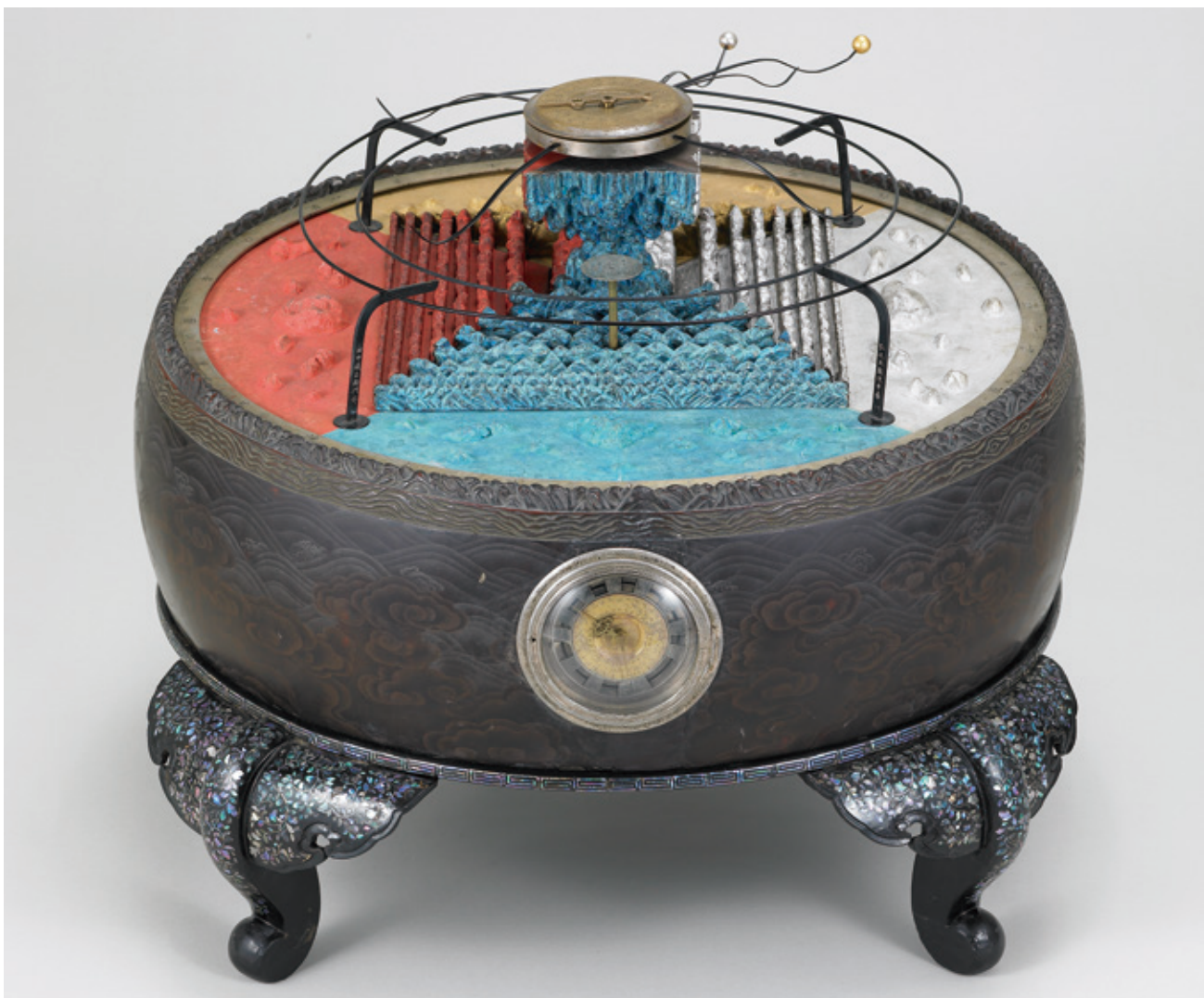
(請求記号〇二・一・〇三二)

西本願寺の旧蔵にかかる『混一疆理歴代国都之図』は、明治時代に朝鮮から将来された、現存する世界最古の世界地図の一つである。朝鮮の役の際、加藤清正が熊本の本妙寺に献納した『大明国地図』などと同じ系統のものとされている。

絹地に描かれたこの地図は、下段にある朝鮮王朝建国の功臣権近が記すその由来によると、明の建文四年(一四〇二)、左政丞の金士衡と右政丞の李茂の命を受けた李薈が、明王朝からもたらされた二つの地図を合体させ作成し、簡略であった朝鮮半島と日本列島を描き直したものだという。

本学に所蔵されるものは、図中の朝鮮半島に記されている地名などから、実際には一四七〇年代以降の改訂版と考えられるが、製作年代については、いまだ検討の余地がある。しかし、現存する同系の世界地図の中で最も古いものであることは間違いない。

李薈がもとにした二つの地図とは、モンゴルⅡ元朝時代の一四世紀半ば頃に作成された李沢民の『声教広被図』と清濬の『混一疆理図』である。そのため、図に記される地名の多くは、世界帝国を築き上げたモンゴル帝国時代のものである。大航海時代より前にアジアで作られた世界地図として、研究上の価値は高い。



8

須弥山儀

一基 環中禅機・晃嚴依頼 田中久重製作
弘化四年（一八四七）着工 嘉永三年（一八五〇）完成

須弥山の須弥とは梵字「Sumeru」（スメル）の音写で妙高と訳される。

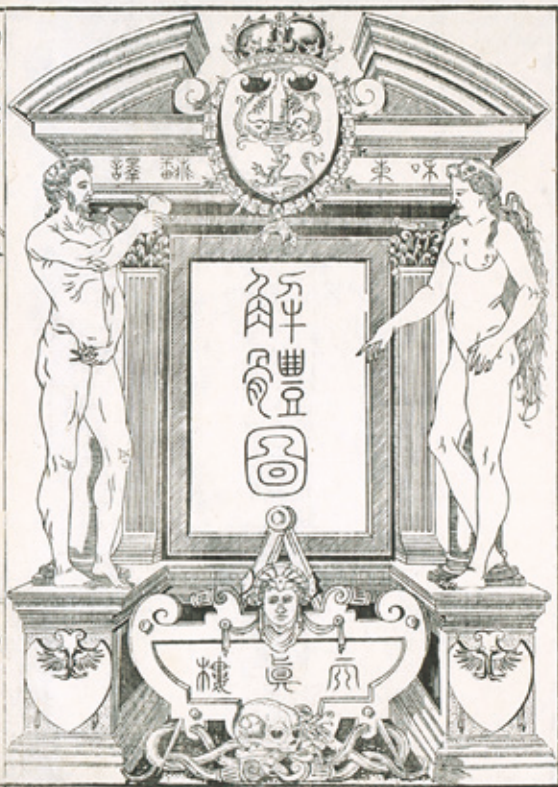
古代インドの宇宙観で、一須弥世界の中心にある高山を指す。仏教ではこの須弥山説を踏襲しており、江戸末期にはこれを一般に易しく理解させるため、リンが鳴り太陽と月が時計仕掛けで動く模型を考案した。これが「須弥山儀」である。

仏教では、古代インドの宇宙観を受けつぎ、世界は須弥山を中心に立体に広がっていると説いてきた。そのため、江戸末期、西洋の地動説が広まることにより、仏教の権威が失われることを誰よりも危惧したのは仏教界であった。殊に天台宗の普門律師円通（一七五四～一八三四）は『佛國歴象編』などを著し、仏教界の危機意識はあまりにも低いと憤慨し、仏法護持の信念を述べている。円通の揺ぎない仏教宇宙観普及の精神は、彼の高弟である天竜寺の環中禅機、その孫弟子である萩の永照寺俱舎晃嚴らによって引き継がれた。

環中らの高弟は嵯峨林泉寺に所蔵されていた円通の「須弥山儀」の掛け軸をみて、師匠の信念を受け継ぎ、これを是非とも実際に動く模型にしたいと願望した。そこで弘化年間（一八四四～一八四七）の当時、からくり細工人としては本邦随一の名声を博していた「からくり儀右衛門」こと田中久重（東芝創立者）に製作を依頼したのである。弘化四年（一八四七）に着工し、嘉永三年（一八五〇）に見事これを完成した。

こうして円通による仏教宇宙観普及の精神は環中によって引き継がれ、環中が発注製作した「須弥山儀」と「縮象儀」（須弥世界で人間が住む場所である南瞻部州を現した天体儀）は晃嚴が引き継ぎ所有した。その後これを晃嚴の次男である村上孝雄師が譲り受けられ、西本願寺の大学林（現龍谷大学）に寄贈された。「六條学報」第七六号には村上孝雄師の寄贈書目として「須弥山儀器械」、「縮象儀器械」が他の関係資料と共に掲げられている。

也。又或震然揭旗鼓、亦皆不知解體之法。徒屬孟浪、豈不閔乎。惜哉。世雖有豪傑士、汚習惑乎耳目、未能披雲霧而見青天也。故苟非改面目者、則不能入其室也。嗚呼。人有能有不能。余之不才、斷斷無它技。唯獨於斯業、專精得以明之。誠無慙乎古之人。而其所權輿、要在改面目也。如與余同志、從事于斯、則庶乎得而至也。雖然、余不憚乎文辭、故於斯書、姑達其意而已。讀者如有不解者、追余之生、質訪之、可也。



9 解体新書

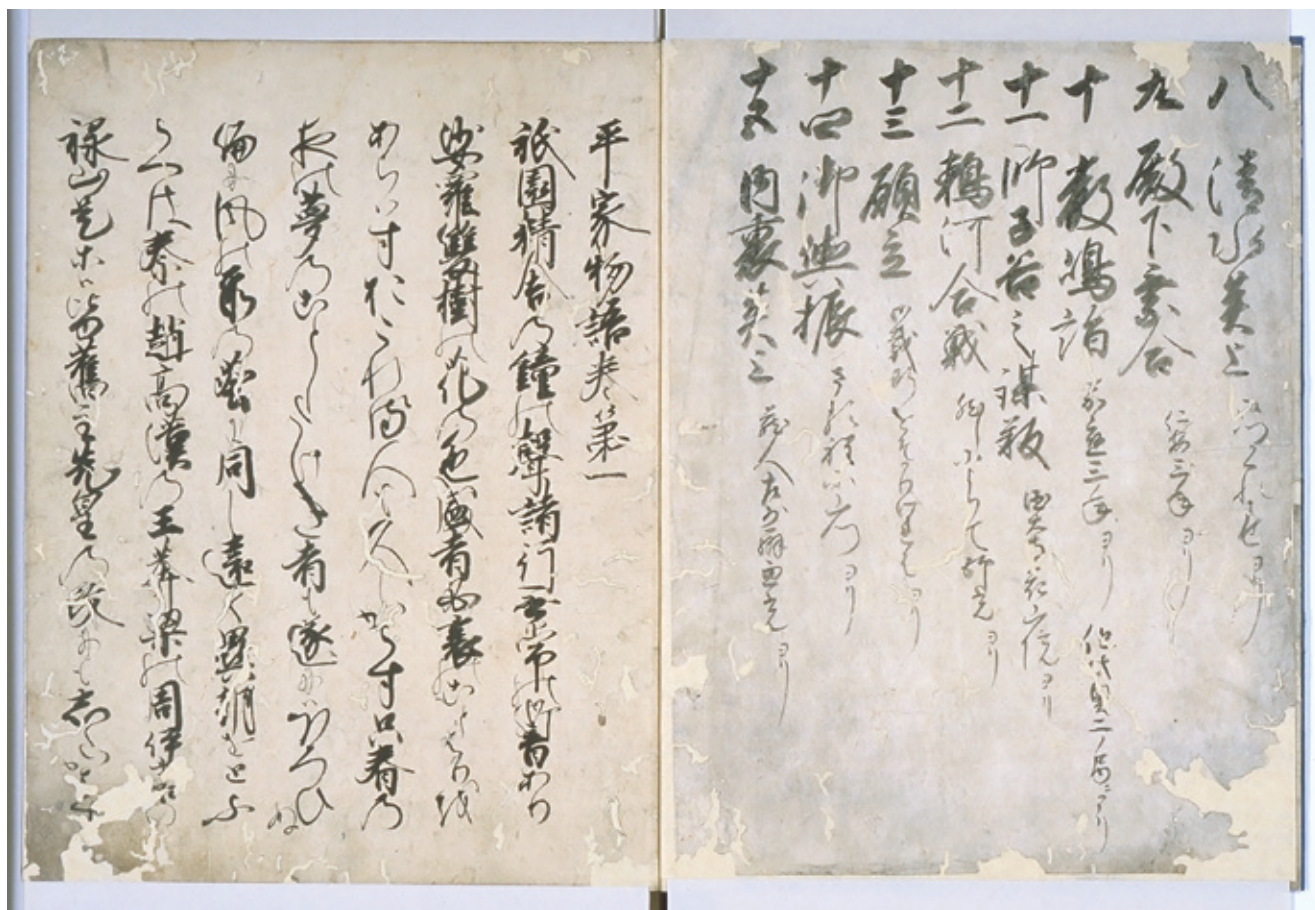
五冊 安永三年（一七七四）刊 杉田玄白・前野良沢・中川淳庵
小野田直武画 縦二六・八×横一八・〇cm
〔請求記号六九〇・九二三六―五〕

わが国最初の西洋解剖書の訳本である。原典は、ドイツ人ヨハン・アダム・クルムスの『解剖図譜』の独蘭訳『ターヘル・アナトミア』である。前野良沢（一七二三―一八〇三）を主に、杉田玄白（一七三三―一八一七）・中川淳庵（一七三九―一七八六）らが桂川甫周（一七五一―一八〇九）らの協力を得て翻訳にあたり、安永三年（一七七四）に刊行した。本文四冊、附図一冊から成る。初版本である。

明和八年（一七七二）三月四日、江戸小塚原における女体の腑分けの見学により、ターヘル・アナトミアの図の正確さに感銘を受け、その翌日から三年の歳月をかけて翻訳し、非常な努力をして完成した。内容は、原典の本文だけを訳し、本文の数倍に及ぶ脚註には触れず、二十八編に細分される。

図は、小野田直武（一七四九―一七八〇）が模写したものであるが、裸体の男女が左右に立ち、上方に王冠と紋章を付した盾がある扉絵は、原書である『ターヘル・アナトミア』の扉絵とは、異なっている。現在では、スペインの解剖学者ワルエルダが著した解剖書の扉絵と構図がほぼ一致していることが指摘されている。また、直武が挿絵を担ったことは、杉田玄白と交流があった平賀源内（一七二八―一七八〇）との関係が大きいとされている。

本書の翻訳・刊行は、一時代を劃する偉業として医学史上高く評価され、以後日本医学の夜明けを築き上げた名医家たちが次々と本書に学び、医学の発達に偉大なる貢献をした貴重な資料である。



10 平家物語

十二冊 室町時代写 縦二八〇×二三・五cm

(請求記号)〇二一・三三三・一一二

平家の栄華と没落を描き、「祇園精舎の鐘の声…」の書き出しで知られる『平家物語』は中世前期に成立して以来、広く愛読され、語り継がれてきた日本文学を代表する作品である。後世への影響も大きく、同じジャンルの軍記物語をはじめ諸作品に影響を与えている。

その原作者については多くの説があり、最古のものは兼好法師の『徒然草』のなかに、信濃前司行長なる人物が作者であると記されている。行長は、鎌倉時代初期、関白・九条兼実に使えていた家司ではないかと推定される。

原本はすでにないが、書写された多くの諸本が現存。大きくは盲目の琵琶法師が琵琶をかき鳴らしながら語るときに台本となる「語り本系」と、読み物として語り本系よりも分量の多い「読み本系」の二系統に分かれる。さらに語り本系統の諸本は流派の別から、一方流諸本と八坂流諸本とに区別される。

龍谷大学本は、語り本系一方流の覚一本である。覚一本は南北朝期の代表的な琵琶法師・覚一が一三七一年(応安四年)、当流の証本として書き遣した伝本であり、奥書に覚一という署名が見える。

なお、龍谷大学本には、同じ覚一系の高野本(東京大学国語研究室蔵)にある「祇王の巻」と「小宰相の巻」がない。その理由としては、同本が最古の覚一本であり、二つの巻は後から創り出されて付加されたと推測される。

このことから、龍谷大学本は覚一系のなかでも最も古い写本として重視されてきた。加えて文学的にも完成された伝本と言われ、日本古典文学大系本『平家物語』(岩波書店)の底本として使用されている。



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

龍谷大学大宮図書館
図書館の至宝

2013(平成 25)年 10 月

編 集：龍谷大学大宮図書館

発 行：龍谷大学大宮図書館
〒600-8268
京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1
電話 (075)343-3311(代表)

印 刷：株式会社 同朋舎